
檻からの唄

御春愁海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

檻からの唄

【Zコード】

N1547BA

【作者名】

御春愁海

【あらすじ】

前世から生まれ変わった少年が、突然に出会った少女と共に願いを叶えるために、魔術師や魔物や人間と戦つていく話です。

世界としては、人間の世界に魔術が秘密裏に存在しています。地理のつくりは、名称などすべてがオリジナルの別世界です。

前世のヒューローク* 水色*

・・・・誰がこんな終わりを望むだろ？

ずいぶん前から俺はもうすぐ死ぬのだろうと、予測はできていた。
そして、今はたいして苦しくも痛くもなんともない。理想の死に方。
でも、お前はどうだつたんだろ？

あの時俺が見たのは、お前の苦しそうな死に顔。

普段からそんなによく笑つやつではなかつたけれど、死に顔は本当に酷かつた。

『おやつと田はあつべ閉じていて、田元に少ししわができる』。涙の跡だつてあつた。

田元からは、大量の血がしたたり落ちていた。

いつも俺が見ていた、綺麗で儂げで、それでもつて偉そりで生意気な愛しい顔とは思えなかつた。思いたくなかった。

・・・・苦しかつたよな、本当に。本当にごめん。俺が気づいていれば、お前を助けられたかもしれない。今頃本当なら一人で幸せに生きていられたのかもしれない。悔やんでも悔やみきれない・・・・。

もし生まれ変わって、お前にまた出会えたなら・・・・俺は・・・・。

現世のプロローグ* 水色*

「」はとある世界。

宇宙に浮かぶひとつのかな青い星。

大陸は全部で22ある。海もある。

歴史としては、人類が誕生してから今のちょうど7000年まで、様々な場所で戦争・紛争が続けられてきた。

そのため、戦争・紛争が長く続いている地域では、自然と武器の強化が急速に進められ、そのスピードはどどまる「」と知らない。代わりに代償としてか食糧はいつも不足しており、衛生面もとても悪く、死因は餓死・病死・戦死がほとんどを占める。

逆に戦争を起こさず、平和に過ごしてきた地域では、科学技術が進歩してきた。

例えば、クローンが作られるようになった。ただ、クローンと言つても植物状態のもので、意識はない。使い道もクローンのオリジナルの人物のドナーになるくらいしかない。そのうえ、クローンを作ることは法律で固く禁じられているため、そう何十体と作られてはいない。

もうひとつ挙げれば、宇宙エレベーターが作られた。

しかし、これが作られたことは一般の人間には一切知らされていない。もちろん建設場所も。

その理由を知る者もそう多くないのだろう。

この世界を大きく2つに分けるとこんなものだ。

そして、この世界には秘密裏に存在する者たちがいる。

自然の力と自分の体内をめぐる力を合わせ、常人ではありえないことをやってのける・・・魔術師と呼ばれる者たちだ。

魔術は家系で継がれるものであり、それも今では4つの家系だけとなってしまった。

魔術は昔から戦争の火種となつて来たため、早々に絶やしてしまお

うと考えるところも多かったのだろう。

現に、いまだその家系で魔術を継いでいる者たちは、表では一切魔術を使用しない。

ただし、その家系の者たちだけである。

* * * * *

目が覚めた。

そこには、真っ白でしわのはいった天井がある。足の方向には、木のタンスがふたつつなげておいてある。そして、寝ているのは青いシーツのベッドの上。

窓から射し込んでくる光は、間違いなく朝のさわやかなそれなのに、それを見た時の本人、灰風雅希はいかぜまさきの心の中は、どうにもうまく説明できない。あえて言つなら、焦りと懐かしさとあととにかく善くないものがいくつか混ざり合つたそんなカンジ。

夢を見たのだ。どんな夢だつたかは、欠片も思い出せないが。

「だめだ・・・はやく・・・」

彼は、もともとそんなに深くものごとを考えるような人間ではなかったため、その夢についてもたいして考えるつもりがないようだ。灰色の髪の毛を右手で搔きながら、両足をベッドから下ろし、立ち上がる。

何だかいつもより頭が重い気がして、ベッド横の姿見を見る。

緑色の目がこっちを見ている。いつも通り。顔でもむくんだかと思つていたが、なんともなかつた。

「はあ・・・がつこーがつこー」

雅希はドアに手をかけ、自分の部屋を後にした。

* * * * *

「おーはーよーうーまつせんつー！」

雅希がリビングのドアを開けると、真っ先にピンクの頭が飛び込んできた。

それは雅希の妹の希亜羅^{きあら}のものであった。希亜羅は現在7歳で、雅希とは11歳差だ。そのため、身長だって雅希の腰あたりにもとどかない程だ。

「おはよーおはよー。・・・ちょっと、邪魔だから飛び跳ねんのやめろ。」

希亜羅は何が嬉しいのか、真っ赤な大きな目をキラキラさせながら、おさげ髪を揺らしながら、雅希のまわりをジャンプして回っている。「今朝はね、」はんがイチ「なんだよーーーいつもの、サラねー、のこげパンむぐう・・・！」

その時、希亜羅の後ろから手がサッとのびてきて、その口を塞いだ。「おーおーおーおー、朝から平和な空気を壊すのはよせっての。」

額からひとつ汗を落としながら、雅希と同じ顔が小声で言った。彼は雅希の双子の麻希^{あさき}だ。顔は全く一緒だし、身長も体重も測るたびに同じだ。雅希と麻希を見分けるのに、手っ取り早いのは、髪の毛だ。雅希は灰色のボサボサ、麻希は黒色のボサボサだ。あとは、性格だ。これは見ていれば誰でもなんとなく分かつてくる。ついでに言えば、この双子はどちらが兄で、どちらが弟かが分かつていない。昔、親に何度も聞いたが、分からぬといつも言われた。だから、どちらが兄かで、よく喧嘩をしたものだ。

「?ー?ー?ー」

「分かつたか、絶対に言つなよ。」

「?ー?ー?ー?ー?ー」

希亜羅は頷きながら返事をした。

「よーし。いいか、いつもはあんなねえさんだがな、あれでも一生

懸命にだな・・・

「あーさきつ、何をしてるのー。」

噂をすれば、何とやら。ひとりの女性がキッチンから顔を出した。クセのある長い茶髪に、緑色の優しい目をした女性で、まさしく雅希たちのあつた。名前は希沙羅。

24歳で、社会人である。仕事は家で小説家として働いている。希沙羅は美人でこの灰風の家も立派な豪邸である。彼氏のひとりもいていいはずなのだが、それがいないのだ。その原因として明らかなことがひとつあつた。

それは、家事が出来ないことだった。・・・いや、全く出来ない訳ではない。やつても何ひとつうまく出来ないのだ。

希沙羅に一日家事を任せてしまつと、朝はこげパンに始まり、夜はぬめつた洗い終わつたはずの食器に終わる。

しかも、一番困つたことは、希沙羅本人がこれらを失敗だと思つていいことだ。まわりは、希沙羅を怒らせてしまつことを恐れて、みんな黙つている。

「はあ、苦しかつたあー。イチゴー！」

麻希の手から逃れた希沙羅はそう言つて食卓へ向かつて行つた。

「もう、あなたたちもいい歳なんだから、もつと大人の対応をしなきや駄目でしょ？才希兄さんも何か言つてやつて。」

希沙羅は食卓でテレビを見ている男に向かつて言つた。

彼こそ、灰風家の現在の当主である灰風才希だ。28歳で長男でもある。茶髪のボサボサ頭に緑色の目。職業は何をしているのか雅希にはよく分からぬが、両親の遺してくれた財産で、何不自由なく暮らせているので、とくに気にならない。

ただ、変だなと感じるのは、雅希と麻希が16歳くらいで才希の身長を抜いたその時から、あまり遊んでくれなくなつた気がする。

希沙羅に話しかけられた才希はテレビに夢中で今までの話を聞いていなかつたのか、

「うーん。それは難しいところだよな。よし、冗談言つてやれ。」

とテレビに目を向けたまま言った。

「ええー。俺ですか？」

テレビの前のソファに寝つ転がっていた人物が起き上がり、顔を出します。

その人物の顔立ちは一言で言えば、とても可愛らしい。しかも童顔で中性的なため分かりにくいが、性別は男だ。

名前は黒葉凪緒。くろはなぎお歳は16歳ほど。苗字から分かるように、凪緒は灰風家の人間ではなく、ワケありでこの家に居候している。意外と家事がちゃんとでき、希沙羅の埋め合わせが出来るため、居候でも少々でかい態度がとれるというわけだ。

彼は真っ青な髪の毛と一緒に、自身の顎をソファの背もたれの上にのせ、双子を呆れたように茶色い目で見てくる。

「そうですねー、はつきり言うと手遅れですね。とくに黒いほう。

そう言つて指差されたのは、麻希だつた。

「ほう。ずいぶん言つてくれるじゃねーの凪ちゃん。」

すでに青筋をたてて怒つている。

「その呼び方やめてください。」

凪緒も睨み返す。

「そんなん・・・私の弟一人とも一生子どもだなんて・・・私面倒見きれないわつ！」

天然の希沙羅は真っ青になつて何か喚いている。

才希はテレビの占い。

希沙羅は・・・

「うわあー。まっさん、朝練習の時間時間。」

焦つた様子もなく雅希に知らせてくれた。

「はあ・・・今日もやつちまつた・・・」

雅希は一度大きなため息をつき、肩を落とす。そして、次の瞬間勢いよくリビングを飛び出し、何か叫びながら自分の部屋へ行き、着替えて荷物を持ち、家を出て行つた。

「マジふざけんなよつ！なんつなんだよこの家はつー？毎朝毎朝つ

！明日からはしっかりしてくれよーー行つて来ますっ！」

一瞬リビングが静まりかかる。

「毎朝毎朝・・・か。それもきっと今日で終わっちゃうよ・・・。」

希亜羅は辛そうに顔を歪めて咳いた。

それから突然才希はテレビの電源を切り、他の四人に向く。

「雅希は？」

「大丈夫です。もうずいぶん離れてますから。」

凪緒がソファの隙間から取り出した端末で雅希のGPSの動きを見て応える。

「希亜羅、時間はいつ頃になりそうだ？」

「夜の・・・8時。」

「分かった。麻希、凪緒、準備は？」

「大丈夫だ。」

「出来ています。」

その様子を見て、希沙羅はとても悲しく思い、胸がキリキリと痛んだ。

（父さん、母さん、私たちだけで本当に大丈夫なの？一度決めたらもう戻れないんでしょう？・・・でも、私は信じてる、祈ってる。例えひとり残されても、命を落としても。また・・・先の未来で）

1*水色*

雅希はひとり焦つて学校へ向かつ。カバンを傍に抱えて全速力で走る。

今季節は春で、学校の新学期が始まつていくらかたつた。桜並木の道を通ると花びらがずいぶんと落ちてしまつていて、花びらで滑つて転けたら嫌だなーと考えていたその時

「ああー！ぼうしがあー！」

突然に甲高い声がしたのでそちらを見てみた。すると、三人の赤いランドセルを背負つた少女たちが、道の柵に登つて下を覗き込んでいた。ランドセルのツヤからして、希亞羅きあいらと同じ年くらいだろうか。いや、希亞羅はワケありで小学校へは通つていないので。しかし、雅希はテニス部の朝練習があるから早くに登校しているわけであつて、小学生の少女たちがこんな早くに家から出て来ていることに疑問を抱いた。

それにして、気になるのは少女たちの行動だ。あの柵の向こう側には湖がある。昔父親から聞いたことだが、その湖には底が無いのだそうだ。雅希はそれを信じてる訳ではないのだが、今の少女たちの状態は危ないだろ？

雅希はどうすべきか悩んでいた。

「あ・・・。」

こちらに向かつて声がしたので、改めて少女たちを見る。ぱちり目があつてしまつた。

きつと少女たちは、雅希のことを見て思わず声を出したのだ。仕方が無いので、ついに雅希は朝練習を諦めた。

「えつとー、どうした？」

雅希は少女たちに近づいてみた。すると、三人は困つたようにお互いの顔を見合わせて、やつとひとりが口を開いた。

「あのね、お兄さん。ちはるちゃんがね、ぼうし落としちゃつたの。

ほり、

そつぱつて、指差す先には確かに黄色の帽子があつた。しかし、湖の上にからうじて浮いている状態だ。

「あの帽子どうしても必要か？」

雅希は苦笑いで尋ねた。すると、ひとりだけ黄色い帽子をかぶつていない、恐らくちはるちゃんが不安そうな顔をする。

「もうしかぶらないと、学校入れてもうえないので。」

またさつきの少女が言つてきた。

（なんだそりゃあ。私立の学校か？）

「分かった。取つて来るからお前は、ぐるなよ。それと危ないから柵にも登るな。オッケーか？」

「はーい！」

そんな会話をしながら、雅希は幼い頃に麻希あさきと兄の才希わいきと遊んでいたことを思い出す。

そして、柵を飛び越し土手をそのまま下りて行つた。

* * * * *

帽子は風のせいでか、ずいぶんと柵のあたりからは遠ざかっていた。雅希が思つていた以上に、湖の中は冷たく、そして綺麗に水が透き通つていた。これなら底がどうなつていて見えるかもしない。しかも、制服もびしょ濡れにしてしまつたことだし。と、やけくそになつた雅希は深く潜つてみた。

本当に湖の底が見えない。どこまでも透き通り、輝いている。あたり一面青。

（こんな綺麗なのに、ここで夏とか水遊びしてみたことねえな・・・）

そんなことを考えてみると、ポチヤンという水音が片耳をかすめた。

雅希は少し驚いて、湖の水面から顔を出す。

「お前――――――何しとるんじゃ――――――？」

「・・・・は？何って言われても・・・・。」

見知らぬおじいちゃんに、この歳になつても怒鳴られるとは思つてもいなかつた。

「立ち入り禁止じゃつ――この湖にはつ？」

（まじでかつ――？）

焦つて出ようとするが、

「お兄ちゃん何してるの――ほつし早く取つてよお――？学校遅れち

やう一つ？」

「あつ？悪い？今取るからなつ？」

雅希は帽子に手を伸ばした。

* * * * *

雅希は保健室で着替えるための制服を借りて、着替えて教室へ入つた。

自分の家におことは違つ、保健室の独特のにおいがしてどうにも

居心地が悪い。

「おつす！灰風――！」

教室の掃除用具入れの前にいた男子三人が、雅希の方へやつてきた。

「おはよ。」

雅希はさつきのことがあつて、どうにも気分が乗らない。

「おじおじおいおい！テンション低すぎねえ？！」

「今朝の朝練習はついにサボつたしな。」

「そうだよ！みんな心配してたぞ！灰風がサボるなんてつて――」

あんなことになる直前までは、雅希だって行く気満々だったのである。

なんだかややこしいことになりそうだし、心配もかけていたようだつたので、全部話すことになった。

「分かった、分かった。心配かけて悪かったな。」

「……おう。」「

素直に言つてきたことに驚いたのか、三人は目を丸くして静かにうなずいた。

「一応話すけど、絶対笑ってくれんなよ。」

雅希は今朝急いで家から飛び出したところから語りだした。

* * * * *

雅希の学校生活は今日もなんら変わりはなかつた。

普通に友人とゲームや漫画や、時々自分たちの進路の話をして。

授業は注意してこない先生の時だけ寝て、苦手な美術は絵具が制服に付かないように頑張つてみた。

掃除は他の生徒より先に行つて、二つしかない掃除機をキープして。部活ではダブルスで試合をした。試合といつても、点数は面倒くさいのでつけなかつた。でも、雅希は自分のペアが勝つっていた気がした。それからいつものように禁止されることだが、部室にラケットを置いてきた。顧問の先生に見つからないように、ソファの下に五人くらいで隠しているのだ。

ただ、ひとついつも違うのは他のクラスの生徒から聞いたことだが、麻希が学校を欠席したらしかつた。

(朝あんなに元気だつたじやねえか。あいつさぼりか?)
だが、麻希は意外と真面目でしつかりした人間なのだ。さぼりとは考えにくかつた。

(じゃあ、凧緒に怪我させられたとか?)

居候の凧緒はちょくちょく麻希にちょっかいを出す。

例えば、麻希の部屋のドアをノックしてダッシュで逃げる、『ピンポンダッシュ』ならぬ『ノックダッシュ』をしたり、出かけるときは必ず麻希の靴を踏んで行つたり。その中で、雅希の印象に一番残っているのは、玄関の前に巨大落とし穴が作られてあつたことだ。だが、麻希を落とすはずだつたそれに落ちたのは、先に学校から帰つていた雅希だつた。

こんないたずらを繰り返す冗談だが、それでケガ人がでたことは一度もない。そのためこの原因はもつと他にあるはずだ。

(・・・誰かが急に倒れた、とか?)

ここから先はどうもいことが浮かばなかつた。

「でさ、井口先生が言つたセリフ覚えてるか? ! 灰風つ!」

「・・・」

「灰風つてば!」

ひとりの友人が名前を呼ぶ。まわりは不思議そうに雅希を見ている。

「ああ・・・悪い、俺ちょっと今日早く帰るんだつた。」

雅希は悩んでいるときのクセで、左手で自分の額を何度も軽く叩きながらつぶやいた。

「え、そうなのか。」

「それならもうちょいはよ言えよー!」

雅希の様子がおかしく思つたのか、友人たちは明るくそう言つてくれた。良心が少し痛む。

「悪いな・・・。」

「気にすんなつて!」

「早くいけよ、急いでんだる。」

「悪く思うなら明日井口先生のモノマネやれよなつ!」

「また明日な、」

(ほんとにいいヤツばっかりだ。)

「ああ、明日モノマネでも一発芸でもやつてやるよーじゃあなつ!」

雅希は今朝以上のスピードで駆けて行き、少し先の角を曲がつて見えなくなつた。

「変だつたな。」

ひとりが言つ。

「ああ、変だつた。」

まわりが応える。

「調子悪いんじゃね?」

「病気だな、あれは。」

みんな揃つて頷く。そして口を揃えて

「――「中二病」」

どつと大きな声で笑い出した。

「だつて・・・・・見たかよあれつ・・漫画かつて感じー。」

「あれはねーよつー左手!」

「ホントおかしい! はははつ!」

「魔法陣つてやつだよな、左手の甲のところ描いてあつた青つぽいやつ!」

「今日の美術の時間に描いたんじゃないか? 一器用なやつだな!」

「すごい上手かつたよな!」

「ああ! 明日灰風も入れて話そづせ。」

「おもしろいやつ!」

「ツツコミ入れてもらひつて待つてたんじゃないか?」

「明日が楽しみだ!」

だが、雅希は自分の左手のことをまだ知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547ba/>

檻からの唄

2012年1月10日23時48分発行